

まちかね山 吹奏楽団

第8回定期演奏会

特集！ 福田 淳氏 インタビュー

まちかね山吹奏楽団第8回定期演奏会の客演奏者としてお招きした福田淳先生が、初めて当団の練習にお越しいただいたのは2月27日のことでした。福田先生と学生時代から面識があった客演指揮者の小野川昭博先生にもご同席いただき、福田先生のご経歴等についてのインタビューの場を設けました。当団の団員も数名加わり、とてもリラックスした中での対談となりました。

(敬称略)

——福田先生は、岡山県の作陽高校音楽科、京都市立芸術大学(以下、京芸)を卒業されて、今は大阪市音楽団(以下、市音)に所属されています。まずは、京芸にはどのような志望動機で入学されたのでしょうか？

福田…そもそも、オーボエは中学生の時から始めてたんですね。加古川市にある平岡中学のオーケストラクラブに所属していました。MBSの音楽コンクールで全国大会に行くようなクラブでしたね。中学時代はほぼ独学だったんですけど、中学3年の時にたまたま兵庫県オーケストラ協議会が主催するオーボエの講習会が神戸であったんですよ。それを受けに行ってみたかったんですけど、行っていないのかわからなくてね。その当日に中学校の先生に、「受けに行ってもいいんですか？」って駅から電話したんです(笑)

実際、受けに来ていた人は大学生や大人ばかりで、中学生なんて一人だけで

したけど。でも、その時に講習していたのが、当時京芸でオーボエの教授をしていた岩崎勇先生だったんです。

——もしかして、その時に京芸を目指そうと思われたのですか？

福田…そうですね。



でも、元々音楽は趣味でやろうと思っていた程度だったんです。実際高校進学は普通科の高校に行くつもりでしたし。でも忘れもしない中学3年の12月23日に「やっぱり音楽で行きたいな」と決意して、学校の先生に言ったんです。当時の先生は、平岡中学校にいられる前は中部中学校におられました。中部中学校の頃からこの先生は、岡山県にある作陽高校の音楽科に何人かの卒業生を送り出されていたことがあったんです。現在広島交響楽団にいるコントラスの人もそうなんです。

そういう経緯もあったので、作陽高校への進学を紹介されたんです。「普通の授業もあるし、レッスンに通わなくても授業に含まれているから、行ったらどうや」と。

——中学卒業直前の冬に音楽科に行くこと決められたんですね。試験対策はどうされたんですか？

福田…ピアノは小さい頃からやってたけど、試験で出てくる聴音なんてやった事もないし、そういう音楽系の勉強もしたことがなかったんですね。そういう人のために夏と冬に講習会あるんだけど、夏なんて音楽科に行くなんて思ってもいなかったし、冬ももう終わるし。でも、先生は「大丈夫、ちゃんと(作陽に)言ってくから」とおっしゃってくださった。『聴音も見たる!』と言いながら二回も見てくれへんかったけどね(笑)

——すごいですね(笑)そして、作陽高校に行く事を決められたわけなんですね。

福田…先生の紹介があったのは事実ですけど、進学を考えているときに作陽高校のパンフレットを見てたら、オーボエの講師に岩崎勇先生の名前があったんです。「あ、あの講習の先生や!」と思って。そこから、「京芸に行くために作陽高校の音楽科に行こう」と考えるようになりましたね。

——かなり明確な目的意識をもっておられたんですね。作陽高校の試験ではどうでしたか？

福田…これまでレッスンを受けてきたわけじゃないし、神戸での講習会を一回受けただけで、独学で教則本見てリードを削ったりしていた程度なのに音楽科を受験したことに、面接官に驚かれました。

たね。

面接の時に「誰かに習っていますか？」と聞かれて「いえ、誰にも習っていないです」って答えたらずびつくりされて。「曲はどうやって決めたのか」と聴かれたら、「楽譜屋さんに聞いたら『これとこれの2曲しかない』って言われたので」って答えたら、呆れられるやらびつくりされるやらで（苦笑）

——そして、京芸を目指しながら高校時代を過ごされるわけですね。

福田：高校に入ってからようやくレッスンを受け始めました。そうして楽器を買うことになった時に、奈良に住んでいた岩崎先生の所にお伺いしたんですね。すると先生は、「ああ、あのときの中学生か」って覚えてくれてたんです。その時に、自分は京芸に行きたいと話をしたのを覚えてますね。

作陽の音楽科のクラスメイトのみんなはそのまま大学に上がれるから、何もしないんだけど、僕は京芸に行くために来ているから、と積極的にレッスンを受けながら、はつきりと進学を意識していましたね。

——高校から音楽に専念するのはそれだけ明確な意識がないと出来ないことなんですよね。

福田：でも、「こんなはずじゃなかったの」とか、「イメージと違うなあ」と思った事はありませんよ。

高校入った時も大学の時も、音楽の道選んだのは間違いないかなと思ったりました。

だつて、「潰し」がきかないでしょ？ 科を限定してしまうと。

高校の普通科とか大学の学部行けば、多少専門と違うところでもそれなりに就職はできるわけでしょうところが音楽科に限定しちゃうと就職口は圧倒的に減りますからね。京都の堀川高校の音楽科に行つた仲間とは、自虐的に「お前も中卒か」って言いあたりするくらいですからね（笑）

——音楽科の就職は厳しいと伺っていましたが、それを象徴するエピソードですね。

福田：そうですね。

音大を卒業して音楽の仕事に就職できなかつた、あとは頭を使わない肉体労働とかね（笑）

昔は音楽家がだめなら学校の先生にという時代があつたけど、僕らの頃はそれも難しくなつてきてね。ホントに普通のアルバイトしかない。よっぽど音楽に対して意識を高く持つて続けていてもオーディションに残るのは何十人の中で一人しか残らないし、それがそのまま就職につながるとは限らないんです。

一人も残さないときだつて最近が増えている。そういう意味ではそれを生業に、っていうのはなかなか厳しいよね。

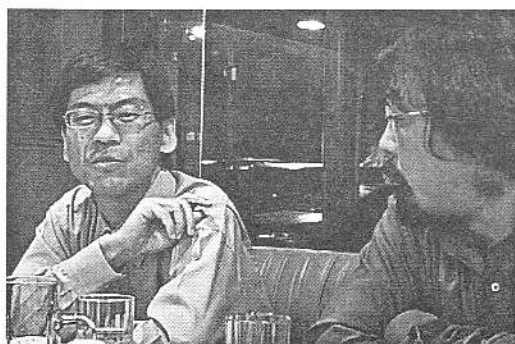
——京芸時代も演奏活動はされていたんですか？

福田：20歳の頃からフリーで演奏はしてましたね。

半分仕事しながら半分学生みたいな感じですね。

授業はちゃんと出てましたよ（笑）で、卒業するときにオーディションも受けたけど、当然受からなかつたんで、ちよつと京芸に大学院が設置された時代から進学したんです。

その頃に日本管打コンクールが始まつて、第4回ではじめてオーボエ部門ができました。その年のコンクールには、京芸からはトランペットの佐藤元昭（現大阪センチュリー交響楽団）と打楽器の宅間齊（現 京都市立交響楽団）と自分も入賞したんですね。



——そのまま大阪市音楽団に入れたわけですか？

福田：市音の前は、大阪シンフォニカー交響楽団（以下、シンフォニカー）の首席奏者でした。そのときの指揮はフルートのトーマス・ザンデルリンクで、気に入つてもらつてただけ。

でも半分アマチュアのようなプロのような微妙な感じで、給料も固定じゃなかつたので、他のオーディションがあつたら受けようかなと思つてたんです。

ただ、その頃は結婚もしてましたし、28歳になつた頃に「30歳になつたら線を引こう、どこかオケでも定職に入れなければ、音楽はやめよう」と割り切つてたんです。それは家族から言われているわけではなくて自分の中で決めていたね。

そう思つていた頃に、宝塚歌劇団の募集があつたんですよ。その頃は宝塚にはエキストラで参加して、とても先方からも気に入つてもらつていたので、もう決まりのような感じだったので、応募したんです。そしたら、急に市音でアンサンブルしていた先輩から、市音のオーボエ奏者募集の話聞いてね。

楽団の中の体制が変わつて、楽員がマネジメントをすることになって、オーボエの人の異動が急に決まつたんです。その結果補充人員が必要になつたらしく、オーディションを4月にして、採用は6月からという話になつたんです。

市音の先輩からは、「絶対入れるとかは言えないけど、受けてくれへんか」と。「確実なんですか？」と聞いたけど、「それは言えない」と（笑）



——宝塚に入るか、市音に入るか、迷われたわけですね。

福田「少し話は飛ぶんだけど、プロの吹奏楽団だった大阪府音楽団（現在の大阪センチュリー交響楽団、以下、府音）つてのがあつてね。そこには、大学の頃からエキストラで行ってたんです。中学からずっとオケだったし、他の仕事でもオケだから、ブラスのイメージがすごく悪くてね。中学・高校でのブラスは力任せに吹いているのしか聞かないし。それが、府音に行つたときに、「あ、ブラスも悪くないな」と。

すごく上手いわけじゃないけど、プロの吹奏楽団に触れて、この世界も嫌いじゃないなと思つたんです。でも、府音は将来、団がなくなるのが当時決まっていたんです。そんな中、市音の話があつたんですね。

市音は先輩が所属していたけど、演奏は聴いたことがありませんでした。92年だったかな。1月にイベル作曲の『寄港地』の録音があつて、そのときに「オーボエのソロは、メンバーでは吹けないから」と頼まれ、初めてエキストラで行つたんです。

「こんななんもあるんなあ」と思つてたら、そのときの市音の団長である木村（吉宏）さんがすごい氣にいつてくれて。

「アレなんとかならんのか」つて言つてたらしくて（笑）

——オーケストラですつと活動されていましたが、吹奏楽の世界に入る事に抵抗はありませんでしたか？

福田「実際、吹奏楽の世界はそこからスタートでしたけど、「吹奏楽だから」という線引きは自分の中にはあまりなかったですね。同じ音楽でしょ？」

例えば、ジャズ吹くときにはその吹き方つてのはあるけど、中にあるスピリッツは同じで、まとうものが違うだけだと思ふんです。

クラシックやるのか、バロックやるのか、オケやるのか室内楽やるのか、吹奏楽やるのか。そのやり方が違うだけだと思ふんです。すべてに対応できれば別に全然問題ないなと。

前述の宝塚歌劇団のオケもとても魅力的でした。バレエもオペラもすごく好きなんです。だけど、そういう思いから市音に行く事を決めましたね。



——それでは最後に、福田先生の考える、吹奏楽におけるオーボエの魅力は何だと思われませんか？

福田「バンドの音色に文字通り「色」を持たせることができる」ということですね。さらにファゴットもそうだと思います。

小編成で人数が減るほど、音色に色加わる楽器を入れたほうが良いと思うんです。少ないが故に、いろんな色を出すためにはオーボエ・ファゴットが入ったほうが、絶対に色彩感が豊かになりますよ。

それをわからずに無神経に吹くんだったら、いないほうがいい、となっちゃいますけどね（笑）

そういう意味でも、色彩的にはポイントになるような気がしますよね。

——なるほど。

ありがとうございました。本番での演奏を楽しみにしています。ありがとうございました。

まちかね山吹奏楽団

今後の活動案内

第60回吹奏楽コンクール
大阪府大会 出演予定

2010年8月中旬

メンバー募集

2010年5月中旬

開始予定

第9回定期演奏会

2011年

3月5日（土）

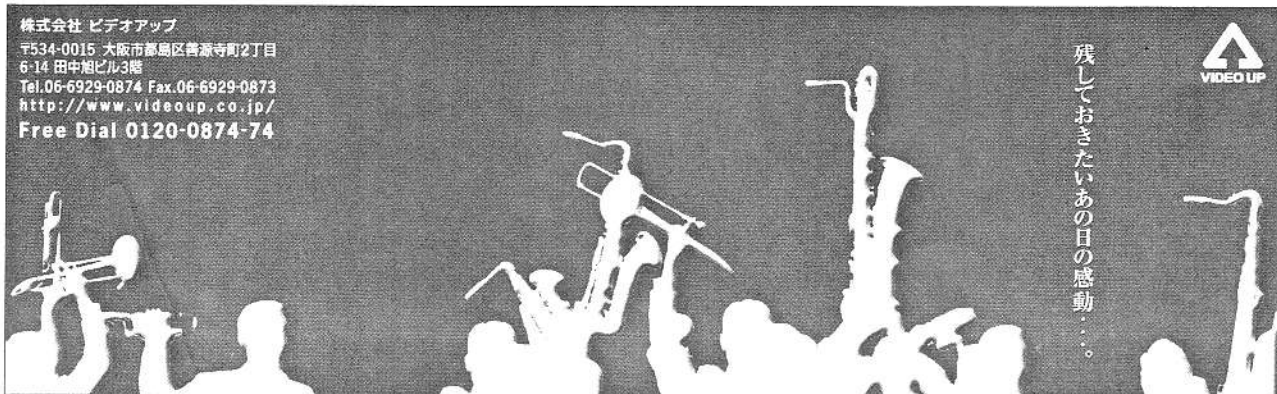
（大阪国際交流

センター大ホール）

客演指揮

小野川 昭博

株式会社 ビデオアップ
〒534-0015 大阪市都島区善源寺町2丁目
6-14 田中旭ビル3階
Tel.06-6929-0874 Fax.06-6929-0873
http://www.videoup.co.jp/
Free Dial 0120-0874-74



残しておきたいあの日の感動……



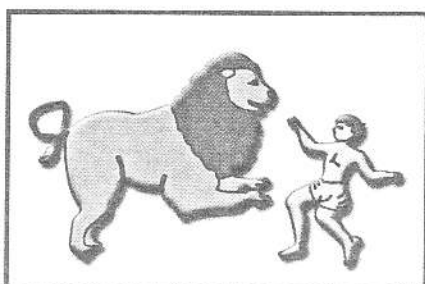
「ローマの祭」その世界観

今回の演奏会のメインとして取り上げたのは、レスピーギの名曲「ローマの祭」です。この曲は、交響詩というタイトルがついている通り、具体的な場面を描いた曲です。ここでは、4つの楽章の描写を少し詳しく解説いたします。

第1曲…チルチエンセス

世界史上、最も残酷な独裁者の一人としてあげられる古代ローマ帝国の皇帝ネロ（西暦37年12月15日～西暦68年6月9日）。彼は100万人都市であったローマが数日も燃え続けた大火災「ローマ大火」（西暦64年）をキリスト教徒の仕業であるとし、多くのキリスト教徒を処刑しました。

レスピーギは古代ローマのコロッセオで行われた猛獣による公開処刑の様子を極めて直接的に表現しています。



例えば、冒頭は銅鑼の音とともにトランペットによるファンファーレが円形スタジアムであるコロッセオの様々な方向から吹き鳴らされ、低音楽器が猛獣の威圧的な入場を表現し、それに並びながら教えるを信じ聖歌を歌い祈るキリスト教徒を木管楽器が表現しま

す。そして金管楽器の表現する猛獣たちの咆哮と絡み合いながら高まっていきます。そんな中、再びトランペットのファンファーレが容赦なく鳴り響くと、公開処刑はクライマックスへ向かいます。キリスト教徒への迫害は、313年に正式に国教として認められるまでの約250年もの間、続けられました。この第1曲の最後は、その悲しき歴史が長きにわたって続くことを予感させて次の時代の祭りへと移っていきます。

第2曲…五十年祭

旧約聖書ではユダヤ民族がカナン（現在のイスラエル、パレスチナ）に入った年のことを「ヨベル（安息）の年」と呼んでいます。ローマではこれから起算して50年ごとにすべてのものが元に戻ることを、その年を「大恩赦の年」として祭りをおこなうようになりました。

第一回は暴君ネロによるキリスト教徒の迫害から約1200年後の1300年に始まりました。現在ではこの祭りは25年に一度行われています。

大恩赦という名の通り、ローマの教会を巡礼することで全ての罪から解放されるというものですから、数百万人も巡礼者が押し寄せるといわれています。

第1曲とは打って変わって、音楽は祈りをささげながら、重い足取りで歩く巡礼者の描写から始まります。

曲の前半は長調も短調も感じさせない5度の音程を多用し、空虚な感覚で支配していますが、急激な高まりの中、音楽はエコー効果を伴って音の洪水となります。

罪から解放された巡礼者達は各々の生まれ育った土地へと去っていく、ほのかな幸福感を残し音楽は次の時代の祭りへと移っていきます。

第3曲…十月祭

カステッリ・ローマーニとは、ローマの南東、丘陵地帯に位置する14の町の総称でワインの名産地として知られています。また、イタリアの10月は栗がたくさんといわれることも特徴で、実りの多い秋の様子を表したのがこの音楽になっています。作曲者の言葉（パンフレットの楽章紹介参照）にもあるように、狩りをイメージさせるホルンの呼び笛から曲は始まります。

見晴らしのよい丘陵地帯へピクニックに出かける人々の高揚感、馬の首につけられた鈴の音、恋人にささげるマンドリン（イタリアの民族楽器）による愛のセレナーデなど、のどかな秋の一日が描かれています。一日が終わり、夜がやってくると同時に時代はさらに進んでいきます。

第4曲…主顕祭

現代の日本では12月25日はイエスの誕生日として知られていますが、キリスト

教では、1月6日をイエスが神性の人々の前で表したことを記念する日として「主顕祭（公現祭ともいう）」といい、イタリアでこの日は「Epifania」という祝日になっています。

また、キリスト教を国教とする国々は12月25日から1月6日までの間をクリスマスシーズンとしています。

そのため、イタリアの12月24日、25日は帰省して家族と家で食事するような落ち着いたものですし、子どもたちはクリスマスだけでなく主顕祭でもプレゼントをもらい、サンタクロースではなく「ペファーナ」という笑顔を振りまく老婆が、お菓子を持つてくるという言い伝えがあります。

新年を過ぎたあたりから、街はにわかには活気づき、店という店では特売が行われ、広場では急造の遊園地（ヨーロッパは遊園地が少ないのでこういう機会ではメリーゴーランドなどの遊具が組み立てられる）や出店などが並び、にぎわいを見せるようになります。

E♭クラリネットによるソロを皮切りに、音楽は喧騒と熱狂を増して行き、圧倒的なエネルギーを伴って進みます。音楽が表現しているのは作曲家が生きた20世紀初期のローマですが、音楽を聴くと現在のローマをたやすく想像することができそうです。

レスピーギはたびたび、イタリア復古主義者として語られることがあります。この作品は、ローマには2000年以上も昔から刻み込まれた歴史や非常に長い時間の中で、しっかりと根付いた文化がある事を教えてくれるのです。